

011 Tomy Jr.

「日本の弓術」 オイゲン・ヘリゲル：述／柴田治三郎：訳／岩波文庫／1982年

☆☆☆

弓を習い始めて4年経ったある日、「的を狙わずに射中てることなど、自分には理解も習得できない」と苦悩するドイツ人の弟子に対し、師範は彼を夜、自宅の稽古場に招じた。一言も発せずに自ら弓を取り、真っ暗闇に向かって二本の矢を射すると弟子に矢をあらためてくるように目で促した。夜の闇の中、的の前で弟子が目にした光景とは. . .

大正末期に東北帝国大学で教鞭をとったドイツ人哲学者オイゲン・ヘリゲルが日本文化の奥儀を知るべく、当時弓聖と呼ばれた阿波研造師範に師事した5年間の修練の成果を、帰国の7年後にベルリンでドイツ人向けに講演（1936年2月25日）した内容の翻訳本である（「著」でなく「述」となっているのはそのため）。ヘリゲル氏はこの12年後に日本文化と禅仏教に関する比類なき名著と名高い「弓と禅」という著作を残すが、本稿はその原本とも呼べるものである。本書には、在日時に彼の通訳であり兄弟子でもあった小町谷操三氏の「ヘリゲル君と弓」というサイドストーリーも収録されているが、それらを合わせても全体で100ページ程の極めて薄い文庫本である。しかし極めて深い内容の本でもある。

冒頭の場面はこのストーリーのクライマックスシーンである。ヘリゲルが目にした阿波師範の第一矢は、的の真中に立ち、そして第二矢は、第一矢の筈（矢の後端）に当たってその矢を割っていた。師範はこう諭す。「これは私から出たものでもなければ、私が中てたのでもない。そこで、こんな暗さで一体狙うことができるものか、よく考えてごらん下さい。それでもあなたは狙わずには中てられぬと言い張られるか。まあ私達は、的の前では仏陀の前に頭を下げる時と同じ気持ちになろうではありませんか」この出来事を境にヘリゲルは疑うことも問うことも思い煩う事もきっぱりとやめて稽古に専心し、帰国時には阿波師範から五段の免状を授与された。弓聖阿波研造はヘリゲル帰国の10年後に60歳で病逝、4歳年下のヘリゲルは1955年、71歳で「花びらが木から散るように」（夫人談）静かに息を引き取った。最期の床には彼が大好きだった日本の絹の着物が着せられていたという。

「人は生まれ変わる」 船井幸雄：著／ダイヤモンド社／2005年

☆☆☆

「対外離脱が教えてくれた本当の生き方」というサブタイトルが付いたこの本は、臨死体験の著作を出版している元・ソニー技術者の坂本政道氏、心理療法士の藤崎ちえこ氏との鼎談も収録しており、彼らは米国・モンロー研究所でのヘミシンク・システムという音響システムを用いた対外離脱プログラムの体験を共通認識としている。

生まれ変わりの真偽については、数多くの事例、言説、事象を検証しながら著者の信条や経営コンサルの仕事で出会った数々の体験を基に論を進めている。また古くはスウェーデンボルグ、エドガー・ケイシーという霊能力者から新しくはニュー・サイエンスの旗手、ルパード・シェルドレイクの学説（「100匹目の猿」現象として日本でも知られる）なども紹介しながら、仏教用語で言うところの輪廻転生、西洋的に言うところにリー・イン・カーネーションは疑いがたい事実であると断言している。

本書の内容は、著者と出版社次第ではトンデモ本の類に入るかも知れないが、経営コンサルタントとしても高名な船井総研の会長が堂々と著作し、メジャーなビジネス出版社であるダイヤモンド社から出版したという点に大きなインパクトがあると思う。私は個人的には著者の主張に概ね同意するが、「だとしたら、どう生きるべきか」という点にもっと焦点を当ててもいいのではないかと感じた。ただ、その点こそ読者各人の宿題ともいえるのかも知れない。

私の基準としては三ツ星(☆☆☆)が「期待通り」で、
他人にとっての基準は自分ではなんともわかりませんので、
あくまでも読む前に抱いた自分の期待が基準です。ですから、
期待が大きければ、ハードルが高くなって星は少なくなります。